

GS デザイン関西自治体連絡会議 設立記念シンポジウム
これからの公共デザインを考える

～組織を超えた自治体ネットワークの構築に向けて～

開催日：平成 26 年 12 月 20 日（土）

場 所：大阪市立大学文化交流センター ホール

第一部：基調講演

「公共デザインは誰が担うのか」 篠原 修

みなさんこんにちは。あいにくの雨ですけど、条件が悪いときに来られた方は本物だと思って、それでいいんじゃないかと思います。

今ご紹介いただきましたけど、よくわからないかと思うので、簡単に自己紹介いたしますと、大学に入学したのが昭和 43 年、西暦で言いますと、オリンピックがあった年で 1964 年です。卒業したのは 1968 年で出身は土木なんですけど、学生時代から景観のことをやっておりました。当時は、土木なのに景観をやっているという、あなたは工学部だと思っていたのに警察関係ですか、と言われるような時代でした。まさか景観で飯を食えるようになるとは思っていませんでしたけど、非常に面白かったので、景観を続けてやってきました。

昭和の終わりぐらいから橋のデザインを手伝いませんかと言われて、橋のデザインをやり始めまして、いくつかやってきました。平成 3 年からは、川のデザインをやり始めて、島根県の津和野というところでやり始めました。平成 4 年からは、きわめて世の中で評判の悪いダムをやりまして、第一号は今でいうと国交省ですけど、国交省の富山県にある苦田ダムでありまして、その仕事は今でも続いておりまして、あと青森県の弘前というところですけど、その西の奥が世界遺産になった白神山地で、その近くの津軽ダムをやりました。

今日は後半で話が出てくるように、いわゆるまちづくり系の駅とか駅前広場とかの仕事を始めしたのは平成 8 年からで、そのときに建築家の内藤廣さんと知り合って、仲がとといいますか、きわめて信頼関係が厚くなったのは、今日、日向市の和田さんが発表してくれまして日向市の駅からです。日向の駅は 10 年弱通いました。それから、旭川の駅は平成 8 年から今年の 7 月に全部できました。19 年通いまして、ようやくできて安心しました。

そんなふうなんです、もともとの専門は景観ですが、途中から公共施設のデザインになって、その二つが専門ということになります。今日はそういうデザインの話をしようかと思ったんですけど、最近、だいぶ前か

らですかね、民営化になりましたし、最近では特に予算不足だとは思いますが、民活といった民間の資金とか民間の活動といった話が非常に盛んで、それはそれで間違っていないと思います。間違っていないと思いますが、民間だけでまちをつくれるわけではないので、いかに公共サイドで、民間でやる企業なり団体なり個人なりが共同してやる体制をつくるか、が重要な問題だと思います。

ですから、今日の話ですが、都道府県とか自治体とか公の部分が頑張らなくていいのはできない、というのは当然です。それで、じゃあ一体全体そういう公共の施設、あるいは公共の空間、たとえば街路であるとか駅であるとか、川であるとか港であるとか、そういう公共施設、ふつうインフラって言うんですけど、インフラのデザインというのはどんなふうなのかっていうのを、頭の整理も兼ねて話したいと思います。

講義みたいになって申し訳ないんですけど、あまり知らないこともあるんじゃないかなと思って、メモをつくってきました。メモは A4 で、表裏になっていたと思います。ちょうどいい機会です、おそらくこんな話は聞いたことがないと思いますので、そういうつもりでお話しをします。

それから、参考資料をコピーしてもらって配りました。一つ目は、都市・田園・自然の景観・施策に関する法令の略年表で、一体全体我が国の景観に対する評価が明治以来どうなってきたかというものをまとめたもので、自画自賛になりますが、これはまことに便利です。それから、土木の分野で戦前から力が入っていたのは橋梁の部門です。伊藤毅さんというのは、建築出身で都市史をやっている人なんですけど、その人に何か書いてくれと頼まれたので、明治以来の橋のデザインというものがどうなってきたかをまとめたものがあります。面白くてですね、タイトルが「近代市街橋のデザイン」となっておりますが、ちょっと耳慣れないと思いますけど、戦前はちゃんと区別してですね、郊外部の橋は道路橋、市街地の橋は市街橋と言っていた。余分なことを申し上げますと、道路をつくる時の法律は道路法ですけど、その技術的な基準は道路構造令です。今は道路構造令だけしかありませんけど、戦前は道路構造令と街路構造令というのが二つあって、街中の道、街路の方は人が使う道なので、郊外部のいわゆる車が通行する道よりもデザインのレベルを高くするというのが決まっていた。大阪もそうだと思いますけど、東京は関東大震災のあとに橋を 400 以上架けました、7 年間で。それには街路構造令に従いまして全部橋詰に広場があります。今度東京に行かれたときに、下町の方の橋を注意してご覧になるとわかると思います。トイレがあったり、交番があったり、木が植えられていたりですね。かなりの部分が首都高

のランプで使われてしまっていて、橋詰広場がなかったら、首都高はできなかつたんじゃないかと思うくらいです。

それから3番目は、「積算資料」という非常に地味な雑誌で、工事のお金をはじくときの資料集なんですけど、この担当の人が篠原さん何でもいから書いてくれと言われましたので、じゃあ好きなことを書きましょうということ、東大をやめた後くらいですかね、土木という仕事は一体全体どういうことなのかということ、3回ほど書きました。（「土木という仕事」、第1回 土木の教育、第2回 その目的、第3回土木の将来）

それから4番目は表だけなんですけど、ダムの仕事結構やってきましたので、さっき言った苦田ダムと山形県の小国というところの横川ダムというのもやっていましたので、その二つを題材にダムをトータルにデザインする本というものを書きました（『ダム空間をトータルにデザインする』）。先輩にですね、まちの話じゃなくてダムの話なのでどういう出版社から出してもらおうのがいいですかねと聞いたら、それは篠原君ねえ、戦前からある山海堂というのがいいんだよと言われて、そこに頼みましたら、その本が出て一週間後ですかね、倒産しまして、やっぱり安易に先輩のいうことを信じちゃいかんなど。これは後で読んでいただければわかると思います。

今日は、1時間ほどなので大した話はできませんが、明治以来ですね、どういう人間があるいはどういう組織が、橋とか川とかダムとかそういうデザインを担ってきたのかという話をします。

1番目は、戦前1つ書いてありますが、直轄インハウスエンジニアです。これはおわかりだと思いますけど、当時、戦前ですから内務省ですね、内務省に入ったエンジニアとか都道府県に入ったエンジニアとか、各市町村にはほとんどいなかったと思いますけど、そういうエンジニアが自分たちで図面をひいて、工事も監督していた。重要な工事ですと、直轄工事で、役所が実際に昔の言葉で言うところの夫を集めて仕事をやってた。それが段々役所で全部やるのが大変だということで、工事、要するに施工の部分は〇〇組というふうに出すようになった。鹿島とか大林とか清水とか。ですから、一番現場に近い工事は民間に出した。それから、これは戦後になってからですけど、設計も民間に出すようになった。それで相変わらず、計画とか企画立案はまだ役所がやっている。丸投げしている役所もあると聞きますが。そんな風にして、どんどん民間へ仕事を落としていった。それは明治政府の殖産興業もそうですよね。最初は全部、八幡製鉄の仕事にしる、役所がつくって、この間世界遺産になった富岡の製糸場ももともと官営ですから。それで、段々事業が軌道に乗ったところで、民間に払い下げるとい

ってやってきた。ですから、そういう言い方をすると変ですけど、日本の国の運営というのは官主導ですよ。ずっとね。基本的には。最近でこそ変わってきましたが。ですから、先ほど言いました様に、戦前は橋とダムについてはかなりのエンジニアがいました。川についても調べたんです。今日は土木の方が多いと思うのでちょっとだけ言っておきますと、建築関係は雑誌がいっぱいあって、どんな建物ができたですとかそういうのが大体わかります。新建築なんていうのは建築雑誌じゃなくてカタログ集のような、こういうのができましたよという。土木は残念ながらそういうのがなくて、日経コンストラクションに出ていますけど、きわめて情報が少ない。後ほど和田さんが話すと思いますが、宮崎県で日向市の駅をやっていて、かなりできた時点で、宮崎県の北側の分県で、大分市の仕事で1年半ほど通っていたものですから、隣の宮崎県でこういうものができつつありますよって言ったら、誰も知らない。そういうこともあって、自治体連絡会議を立ち上げなきゃなあと思ったのが1つです。つまり、情報が非常に不足していて、たとえば隣の県でやっていることを知らない。かく言う僕もですね、大体首都圏と九州とたまに北海道も行ったりしますが、関西のことはほとんど知らない。情報が来ないです。そういうことで、まずいなと思って、自治体連絡会議を立ち上げました。それでですね、建築は雑誌を買えば情報が得られるので、あるいはインターネットでコンペ情報がしょっちゅう出ているので、人によっていろいろですけどね。あの建築家が好きだからお手本にしようとか、ありますけど、一体全体土木の世界で、川の護岸の整備をやって、市民に親しまれるような川にしようと思っても、どういういい例があるかほとんど紹介されていない。ということで、だいたい前になりますけど、国交省の研究所で国総研というのがありまして、正式には国土技術政策総合研究所か、そこでですね、私の教え子の福井君がいたときに、やっぱりどういのがお手本かっていうのがないと手がかりが持てない、つかめない、ということで、規範事例集というのをつくったんです（『景観デザイン規範事例集』全2冊）。橋とか川とかダムとか、戦前の古いやつと現代のやつと。だいたい、橋とかダムとかはどういうエンジニアがつくったかっていうのがわかります。ところが驚いたことにですね、京都の鴨川は、昭和10年だったと思いますけど洪水でやられて、今のようになっている。なかなかよくできていますよね。ところが、京都府の技師がやったっていうのはわかるんだけど、誰がやったかはわからない。それは、川っていうのはデザインの対象だとは思ってなかったんですかね、戦前は。それはともかく、規範事例集というのがあります、いろんな所に配っているはずだから、大阪市とか大阪府には1冊ずつくらいあると思うよ。二分冊なんです。

公園もあります。それで、今言いましたように、橋とかダムはそれなりにデザインの対象だということがわかっていましたので、迎えることが出来ます。ざっと紹介します。橋については先ほど言いました様に、近代市街橋のデザインというふうで紹介してありますので、後で参照して頂ければと思います。戦前には、ここに挙げました6人くらいは非常に有名な人です。あとで言いますが、橋を誰がデザインしたかということがわからなくなったのは戦後になってからです。戦前は全部わかってた。

まず、第一号の樺島正義さんという人なんですけど、アメリカに行ってですね、今の学生と違って大学卒業して向こうの大学院に行くんじゃなくて、建設会社に入る。そのあと、設計事務所に入る。というので何年か修行して帰ってきて、樺島さんは東京市に入ります。

忘れないうちにはなしておく、大阪で有名なのは堀威夫さんという人です。戦前は、この人は大阪市の橋をやっていた。大阪市の橋は伝統がありまして、戦前に土木部の中に橋梁課が課としてあったのは、大阪市と東京市くらいじゃないですか。あとはみんな道路課です。まあ、大阪は八百八橋ですから。

樺島正義さんは帰ってきて、東京市に入ってますね、本当は自分で設計していないんだけど、主任技師ですかね、責任をとる立場でやったのが日本橋です。明治45年です。その後、外堀に架けた橋なんてもうなくなってしまいましたけど、鍛冶橋とか呉服橋とかの橋をやって、戦前には朝鮮にまで行って朝鮮の橋を架けます。

それからもう一人、東京市にいた小池啓吉さんという人は、アメリカに行って修行して帰ってきて、ここに書いた4人は全部、川島・小池・成瀬・阿部はアメリカに修行に行ってきた人です。小池啓吉さんは東京市に入って、ちょうど関東大震災、1923年のときに東京市にいて、東京市が架ける橋をやりました。一番有名なのは御茶ノ水の橋ですね。それから、後で言いますが、東京市の仕事が終わった後、田舎が富山県なので、富山に移って、富山大橋とか早月橋とかいい橋をいっぱい架けます。

それから成瀬勝武さんというのは、次に出てくる田中豊さんの下で、復興局課長補佐をやっていた人で、代表作は御茶ノ水の所に架かっている聖橋です。

それから最後の福田武雄さんというのは大学を出てすぐ帝都復興院に入って、設計をやっている、一番下っ端ですけど、その後すぐにこれは重要文化財になりましたけど、新潟県の萬代橋を設計した。彼の本を読みましたがまことに面白くて、あれは石が張ってありますけどコンクリートの橋で、設計が上手くいってですね、最初に考えていたより相当工費が浮いたので、それで石をはった。驚いたことにですね、それでも余ったので、一年間ヨーロッパに遊びに行っていた。

昔の役所は豪華だよ。それくらいやらないとまずいよ。いい橋設計したら、一年とは言わないまでも、ヨーロッパとか行っていいもの見ないと、いいものはできないよ。道路の方の橋はそうです。

鉄道の方の橋でいうと、阿部美樹志さんという人がいて、北大の出身です。鉄道省に入って、今はもうなくなっていましたけど、外堀アーチ橋とって当時は一番大きなアーチ橋を架けた。この人はアメリカに留学して、向こうでコンクリートでドクターをとった。アメリカでドクターをとった第一号じゃないかと思えます。それで帰ってきてしばらく勤めていたんですけど、とにかく戦前の鉄道省というのは東大閥だから、面白くなかったんでしょうね。それで辞めて、設計事務所をやります。もともと土木なんですけど、土木の橋もやりますし、建築もやる。建築の方の代表作は阪急の梅田ビルです。非常にいい出来でした。

それから最後の田中豊っていうのは、鉄道省にいたんですけど、関東大震災のときにスカウトされて橋梁課長をやって、関東大震災の国が架けた分の橋はほとんど彼が面倒を見ている。戦前から戦後にかけてのボスです。ですから、今でも土木学会には田中賞っていう橋の賞があります。

ダムの方も結構わかっていまして、吉村長策っていう人は、役所に入るんですけどすぐ辞めて大学の先生をやるんですけど、ほとんどの戦前の水道ダムっていうのは彼が面倒を見ている。一番有名どころでいうと長崎の本河内ダムですかね。

それから次の佐野藤次郎というのは、ダムのエンジニアで、ここらへんで一番有名なので言うと、布引五本松ダムですか。彼の設計です。修復工事に行きましたけど、ダムの堤体にちゃんと、**Engineer Tojiro Sano**と書いてあります。だから、戦前は誰が責任をもってやったかというのがはっきりしていた。

それから、中島鋭治も水道ダムの人です。それから小野基樹というのは函館の水道ダムを若いときにやって、それから戦後になって、東京の水ガメになりました小河内ダムを設計した人です。

最後に山口文象って書いてありますけど、これは建築出身の人で、田中豊の上に太田圓三という人がいたんですけど、その人が復興局の土木の局長になったときに、土木の人間だけだとデザインが弱いというので、京都タワーを設計した建築の人を呼んで来て、その下にくっついてきた昔の言葉でいうと製図工です。伝記を読みますと、まことに能力はあったらしいんですけど、親父が清水組の大工で、大工の息子が大学に行く必要はないといわれて初等学校に行って、戦前の逓信省で働いていたんですけど、山田守っていう東大出のやつと一緒に来て、復興橋梁の意匠を担当していた。ですから、山口文象っていうのは後で有名な建築家になりますけど、一番最初のデビュー作は復興橋梁なんです。

今、浜離宮のところの入り口に橋が架かっていますけど、それは彼の設計です。なんと驚いたことに山口文象はダムデザインもやっていて、富山県の庄川のダムは彼の設計です。

というふうに、戦前はですね、土木と建築が組んで結構やっていた。それはなぜかという次に話しますが、建築で佐野利器という人間が出てくるまでは、構造のことはあまりやっていなかったんですね、建築では、建物の設計をやるときも土木のエンジニアと組んでいて、阿部美樹志も川島も随分建物の構造と一緒にやっています。で、今はどうなっているかと言うと、建築の人とほとんど組んでやっていますが、ヨーロッパ・アメリカでは建築とシビルエンジニアが必ず組んでやる。建物もそうだし、橋もそうだし。なんでかかっていうと、専門がそういうふうに分かれています。アーキテクトっていうのは形を考える人、エンジニアっていうのは構造を考える人。なんか日本ではそうならなかったんですね。明治維新になったときに、建物は建築、橋とかダムとか道路は土木。なんでこうなったのかよくわかんないんですけど、僕が考えるに、江戸時代からの考え方を引き継いでいたんじゃないかと思うんです。江戸時代は、今でいう土木ですね、道路をやったり、昔でいう川除工事をやったり、街道をやったりお城をやったり。普請奉行で、今でも道普請とか川普請とか言いますよね、で、その上につくる建物は作事奉行がやっていて、最初は当然両方とも武士がやっていたんだと思いますけど、途中から作事は民間がやるようになっていって、大工の棟梁が出てきて、建物のほうは作事で民間がやる。しかし相変わらず最後まで、普請のほうは武士がやる。本当はその下に職人がついてたんだと思いますけど、勿論。でも熊本城は清正公がやったということになってるし、江戸城の指揮を執ったのは誰だとなっている。そういう伝統があったものですから、インフラに関わる場所は土木だろう、今の言葉で言う上物は建築という分け方になったんだと思うんです。これは世界的に見てもきわめて特殊です。ですから、僕もそうですけど、土木の人間でデザインをやる人間は、ヨーロッパ・アメリカ風に言うとアーキテクトです。建築で、建築って言ったって大学で多いのは構造やってる人とか設備やってる人で、ああいう人はヨーロッパ・アメリカ風に言うとエンジニア。彼らは建築の方がかっこいいと思っているから自分は建築だと言っているけど、本当はあれはエンジニア。それで、エンジニアというのがどう考えられているかというのを一言二言だけ言いますと、もう随分前ですけど、スコットランドに運河を見に行こうってなって、運河を見に行ったんですけど。教える子の中井君と、今東大の教授ですけど、ウロウロ見たり歩いたり写真撮ってたら地元の人に来て、あんたら何だと、何やっているのと言うから、我々はエンジニ

アである、って言ったらびっくりした顔をしていて、ヨーロッパでエンジニアの地位はものすごく高いんです。なんか日本では、変だけだね。もともと、ヨーロッパでも昔はアーキテクト一本だった。要するに、物を作る人は全部アーキテクトで、お城をつくらうが建物をつくらうが全部アーキテクトだった。それが別れたのが18世紀か19世紀からですね。それまではみんな木とかレンガとか石でつくってたわけでしょ。道路だって、建物だって、川の護岸だって。それが、鉄という材料が出てきたものですから、ちゃんと構造計算しなきゃだめだ、計算に強い人間が出てこなきゃだめだということで、アーキテクトからエンジニアがスパインアウトしたんです、新しい専門として。そういう経緯があるものですから、一応全体に責任があるのがアーキテクトで、エンジニアと組んで仕事をやるということになった。さっきも言いました様に明治の日本は、普請と作事のせいだと思うんですけど、対象で専門を分けてしまった。最初は建築でも構造をちゃんとやる人がいなかったものですから、一緒にやっていたんですけど、佐野利器というのが出てきて、これは構造なんですけど、関東大震災のときの、当時は面白いですね、大学の教授なんですけど、帝都復興院という組織の建築局長です。これは余談ですけど東日本大震災があったでしょう。その前の阪神淡路もあって、どうするかなあと思って。関東大震災のときは9月1日に地震があったんですけど、9月27日には帝都復興院というのを立ち上げて、さっき言った土木の総元締めの大田圓三というのは四十代半ばです。田中豊、橋梁課長は三十代半ば。つまり能力の抜擢人事ですね。今度の見ると、どうなってるのかなと思う。国交省の役人を復興庁の何とかにするとか、実績があつて能力がある人間じゃないかと言いつつで断定はしませんけど、笑い話があつて、これは聞いた話ですから本当か嘘かわかりませんが、復興庁というのは随分後になってできたでしょう。復興庁に市町村の人が相談に行つてどうしたらいいですかって言うと、それはわからんから本省に聞きに行つてくれと言われてらしい。そういう面でいうと、組織が硬直化しているって言うのかな。

それで、佐野利器というのが出てきて、この人は建築なんだけど構造をやっている、「色とか形は女の仕事だ」と言ったんですよ、建築なのに。その人が出てから建築でも構造をちゃんとやるようになって、戦後になってエアコンとか出てきて空調を一生懸命やって、今、建築の場合は、意匠と構造と設備ですよ。そんなふうに、建築は自分のところで全部そろようになった。だから構造のことを土木には頼まない。それはそれで僕はいいと思うんですよ。だけど不幸だったのは土木の方で、橋だって川の護岸だって道路だって本当はちゃんとデザインしなきゃいけないのに、デザイ

ンする人間がいないという事態になった。それがずっと続いてきたわけで、平成に入ってからくらいですかね。土木出身でもデザインをやるようになったのは、なんでかっていうと、僕はさっきも言ったように東京オリンピックのちょっと後くらいに出た人間ですから、とにかくデザインの教育なんて受けたこともないし、設計演習というのもあったんですけど、形が決まっただけで、まことにつまらん。今は、東大でも京大でも、嘉名さんがいる大阪市大はどうなっているかわからないですけど、土木とか都市の分野でもデザインの演習をやるようになって随分変わってきました。しかし、そういうことで、デザイナーはずっといなかった。だからまあ、あまりいいものはできないですよ。

戦後の2に移りますけど、設計事務所・民間と書いてあります。これはおそらくみなさん知らないでしょう。僕も知らなかった。どういうことかと言うと、戦前、おそらく民間の設計事務所が少なくとも4つはあった。樺島さんは東京市を辞めた後、自分で設計事務所をやる。関場っていうのもこれもアメリカ帰りで、設計事務所をやる。阿部美樹志も鉄道省を辞めた後、建築もやるし土木もやるし設計をやる。それから増田淳というのも設計をやる。増田淳が一番やってますかね。全国で80橋くらいやっていた。なんでこういうことになっていたかと言うと、おそらく、国にはインハウスエンジニアがいたけど、都道府県レベルでは、構造が難しい橋の設計をできる人間がいなかったんでしょう。だから都道府県あるいは市町村の人は設計事務所に頼んでいた。結構残ってますよ。この近くで言うと、樺島正義さんがやった橋は、各務原の名鉄の所に残っています。増田淳がやったのは、宮崎県に残っています(美々津橋)。非常にいい橋です。それからもう一つ特徴的なのは、フリーランスのエンジニアがいたことです。さっき言った佐野藤次郎は布引五本松ダムをやりますけど、その後違うところに行って電力のダムをやったり、最後は四国に豊稔池ダム、農業協同組合のダムをやったりしている。

次の小池啓吉もそうですけど、帝都復興で橋の設計をやったらもう当分は橋の設計はないよねと言って富山県に移っちゃう。佐野もダムをやったら、もうこれはいいから違う組織へ。こういう人たち見ると、面白い仕事というかい仕事をするためにずっと役所にいるってことはないんだよね。どんどん移っていく。というのが、戦前の特徴ですかね。みなさんに転職を進めているわけじゃないですよ。

それからもう一つは、プロフェッサーアーキテクトというのが今建築で流行りです。つまり、大学の先生をやりながら建築をやる。土木にもいまして、田中豊は帝都復興で東京の橋をやった後、東大教授になって、橋の設計の後身を育てます。福田武雄も橋をやった後

東大に行って教授をしている。中島鋭治も東大にいてずっと水道ダムを教えている。今、建築ではプロフェッサーアーキテクトというのが流行ってまして、一番の走りは誰ですかね、代々木の体育館やった人かな(丹下健三)。あれは都市工の先生で、その後はあまりなかったんです。最近ちょっと名が売れ始めた建築の人はすぐ大学が引っ張りますけど、あれを最初に始めたのは、東大の建築なんです。都市工の大ボスに、本家は建築なんだけど地味になっちゃったんで、芦原義信さんを引っ張ってきた。彼がプロフェッサーアーキテクトが盛んになった第一号ですね。ソニービルを設計した人です。まことに都会風で洒落た人で面白かったです。条件はですね、講義はしなくていい、卒論の面倒も見なくていい、設計演習だけをやればいい。ということだったらしいです。ですから、隈さんとか安藤さんとかいますけど、その流れなんです。僕も土木の分野でそういう感じでやっていたんですけど、本当は良くないんです。純粹の設計事務所ですらばりばりやって、いい仕事をやるというのが本筋です。建築の大御所の一代前に前川國男という人がいましたけど、その人はモダン建築の第一号ですけど、コルビジエの所で修行してきて、当時から批判しています、プロフェッサーアーキテクトという生き方はよくないと。だってそれはそうでしょう。片一方で設計をやって、片一方で東大や京大で先生をやっていたら名前は知れ渡るでしょう。そういう生き方はずるい、というかよくないと。まあ僕もそう思いますね。本当は良くない。

戦前はそんなところで、ざっとお分かりになりましたよね。その特殊性。まあ建築は構造を取り入れて、世界でも有名な建築がいっぱい出ていますから、世界の中では建築の教育としてはちょっと特殊ですね。だけど、世界に通用する建築家がいっぱい出てきましたから、建築の教育としてはうまくいっているんだと思いますよ。今度の国立競技場に当選したザハさんという人は、向こうの教育ですから、構造のことは全く教えない。ロンドンの建築の大学に行った人間も何人かいますけど、聞いていると、もの凄くコンセプトチュアル。アートみたいな。出来ようが出来まいがかっこいい形を出すのがいいんだという教育らしい。そういう意味では、日本の建築教育の方が少しは地道かなと思います。一応構造のこともわかっているからね。

で、現代に続く問題は、戦後です。コンサルタントというのが登場してきた。建築は〇〇設計事務所と言っているのに、何で土木はコンサルタントと言っているのか不思議でしょう？ 実際は設計をやっているのに。なんでかって言うと、戦後になって仕事が増えたので、人手不足で、インハウスエンジニアの手伝いから出発している。つまり役所の人が本来設計すべきなんですけど、人手が足りないの、下働きは外に出すと。外注ですね。だから設計を出しているわけじゃな

くて、雑務を出している。計算だけを出している、こういう感覚。そういうところから出発したのが、財団法人の建設技術研究所です。役所の手伝いをやりました。

二番目に書きました、何で設計事務所じゃなくてコンサルタントなのか。我々の分野じゃない文系とか市民にコンサルタントっていうと、経営コンサルタントですか？商業コンサルタントですか？って。相談に乗るっていう意味でしょ。実際に手は動かさない。土木で本来のコンサルタントって何かと言うと、久保田豊に始まる日本工営です。これは戦後の賠償をやり始めて、インドネシア政府から仕事をもらって、何をやるかっていうと、役所の手伝いをやるんじゃないで、どこの河川の計画からやりますか、どこのダム計画からやりますか、と、調査・計画から全部やる。これが本当のコンサルタントですね。だから、日本でなんとかコンサルタントというのはやめて、〇〇設計事務所とか〇〇計画事務所でもいいと思う。そういうところから出発したものですから、相変わらず、役所発注の著作権は役所が持っていて、設計した人に権利はない。もうちょっと言うと、誰が設計したかというのがはっきりしない。これは、戦後日本ですけど、世界的に見ても非常に特殊じゃないですかね。普通だったら、もちろん一人でできるわけではないけど、主任技師の名前が出て、誰が設計したのか。明石海峡大橋すごいですね。誰が設計したんですか？本四公団です。それは世界的には通用しない。戦前のお阪の橋は全部わかっているでしょ。それが世界の常識。戦後の日本は極めて特殊です。かといって、役所と言っているけど、役所が設計しているわけでもない。そういう意味で言うと、戦後日本の土木の設計は世界的に見てきわめておかしい。これが問題点の1つです。

それから問題点の2は、設計の標準化をやりだした。つまり、インフラが足りないで、高速道路も足りない、橋も足りないで、どんどん設計を標準化しましょう。標準化という聞こえはいいけど、ちょっと勉強した人なら誰でも出来るようにするわけでしょ。さっきイギリスの話を出しましたが、自らの社会的地位を下げた。あれだったら誰でも出来るんじゃないの、自分で自分の首を絞めた、と僕は思う。忙しかったからしょうがないとは思いますが、建築だってやってたんだから。新幹線だって全部同じでしょう。あれも標準設計です。当時はそういう時代だった。あれでも建築学会賞を獲っている。つまり地域の個性とか、設計する人の価値観とかはなるべく出ないようにしていた。

裏面に移りまして、戦後の2で昭和の終わりくらいからバブルの時代になって、建設省が一番景観とかデザインにお金をつけた時代です。まだ覚えておられると思いますけど、日米構造協議(1989-90)っていうのがあって、日本は輸出ばかりして黒字になってけ

しからん、自分の国でもっと消費するようにしないと、輸入を増やすようにしないと。それで一回目の決定で、なんと当時、10年間で公共事業430兆円という計画をつくったんだよ。1年間で43兆円使うと。アメリカの要請に負けて。今どのくらい使っていますかね。国交省ベースで7,8兆くらいじゃないですかね。でもあっけなくバブルが崩壊してダメになりました。さっき土木はデザインが不在だと言いましたが、首都高が頑張って大野美代子さんというのを引っ張り出して、それで橋のデザインをやった。一番最初は歩道橋をやりました。一番有名なのは横浜のベイブリッジですかね。僕よりちょっと年上です。彼女はインテリアのデザイナーです。戦前のように、建築が土木の橋もやるんじゃないで、インダストリアルとかインテリアの人がデザインをやっていた。そうこうするうちに、これはプロフェッサーアーキテクトだから本当は良くないんですけど、僕の先輩の中村良夫さんというのが昭和50年代に、広島の大田川の護岸の設計をやった。これは画期的でした。戦後本格的にデザインをやった第一号だったし、川のデザインをやったのは初めてだった。さっき言ったように鴨川ではやっているんですけど、誰がやったかわからない。で、僕は中村良夫さんよりちょっと下なので、橋とか川とかダムとか、最近は駅とかやってきまして、今日はGSデザイン会議の主催ですけど、別にエンジニアアーキテクト協会というのを設けていまして、エンジニアアーキテクトってどういう意味かという、エンジニアリングもアーキテクトもできるという人間で、要するに土木だろうが建築だろうが公共施設のデザインをやりまよという人間を集めて、これは任意団体なんですけど、今40人くらいですかね。資格はちょっと厳しくしていまして、なんらかのちゃんとした賞を獲った人でないと会員になれない。基本的には、民間の人間です。それにちょっと大学の人間が入っている。

バブル時代はお金が余ったので飾りをゴテゴテつけて、そのあとすぐ不景気になって、特に国交省ですけど、もう景観はやらない、あれは余分だ、と。わかってない。つまり、飾りじゃなくて本体からいいものをつくるというのがデザインなんだけど、飾りだ、って思っていたんでしょうね。

戦後の3になって、ようやく景観法ができて、それから文化的景観というのはちょっと馴染みがないかもしれないけど、文化財保護法が改正されて文化的景観というのが景観法のちょっと後にできて、文化財行政と公共事業がわりとリンクするようになってきた。私もどういわけだか、文化庁の文化財の専門委員になって、建造物と、建造物というのは土木という橋です、それから文化的景観の方の専門委員をそれぞれ10年くらいやりました。その縁で、いまだに宇治にお伺い

して、これはなかなかいいんです。どういかに
言うと、文化庁的あるいは文化国家として、重要文
化財とか国宝ってあるでしょう。お寺ですか、神社
ですか、僕はそっちの方の委員もやっていたから、
今度登録したいやつを、と言って、文化庁の人が
スライドで説明してくれる。このお寺は今度重要文
化財にしたい、と。そんなこと言ったってさあ、前にガ
ードレールがあって、電柱が立っているじゃない、お
かしいんじゃないの、という、いや、あれは指定範
囲外だから関係ないんです、というんです。今までの
文化財行政というのはそんなんです。単体主義。と
ころが、世界遺産の影響でできたんだと思いますけど、
文化的景観というふうになると全体に網をかけるん
です。この近くで言うと宇治はほとんどの所に網がか
かっている、その中でやる公共工事にしろ民間工事に
しろ、文化的景観にかかっているんだから届出をしない
とダメです。つい昨日も宇治川に架かる JR の橋の
ところで議論をしていたんですけど、届けてくると、
こんなデザインおかしいんじゃないの、と注文つけら
れるんです。市町村が、相手が鉄道であろうが国であ
ろうが。これはまことにいいですよ。世界遺産もそう
ですよ。世界遺産でコアゾーンというものがあるん
ですけど、その周りが変なことになっちゃまずい
んで、バッファゾーンでコントロールしてますよ。
それが普通の人間の感覚だよ。ところが今までの文
化財は、そこは敷地外だから関係ないんですとい
っていた。ようやく文化財行政も世界的基準にな
ってきて、実際、ほかの建設事業と一緒にやるよ
うになってきた。大進歩だと思います。僕は、景
観法もできたし、ようやくこれで日本も、文化と
か景観とかデザインとか、法律上だけだけど、
ヨーロッパ並みになってきたと思います。やっぱ
り歴史は大切にしなければ。文化財は大切に
しなければ。でたらめなデザインはしちゃまず
いよ、ということになってきた。それで、もう最
後なんですけど、二つほど書きました。1つは、
インハウスエンジニアの時代にはもう戻れない
でしょう。役所が民間に頼まないで、役所の人
が、橋だろうが川だろうが街路だろうが、全部
図面をひくということはもうしないだろうね、
できないと思うね。そうすると、今回みなさん
都道府県もいると思いますけど市町村もいる
と思いますけど、じゃあ一体全体、役所にいる
技術の人は何をするの？という話になるでしょ。
極端な人は、いらんんじゃないかと言います。
でも僕の経験で言うと、やっぱり技術のことが
わかっている人は発注者側、役所側にいないと
甚だ困る。なんでかと言うと、今は新聞でも
なんでもみんな安い方がいいと思っている。でも
本当にそうですか？たとえば、さっき例にだ
した日本橋は明治 44 年にできてもう 100 年
以上です。東京駅は今年 100 年です。あれ相当
お金かかっていると思いますけど、100 年もも
っている。安く

造って二、三十年しかもたない橋と、かたや 100
年続いて愛着もある日本橋と。日本橋を愛する
会ってのがあって、ちゃんと掃除してるんだよ。
本当はどっちが安いんですかっていう話です。
だから設計する方はさっき言ったコンサル
タントあらため設計事務所に直してもらって、
誰が設計したというのをちゃんと社会的に出
して。じゃあ役所はつまんないじゃないか、と
言うかもしれないけど、僕の恩師の鈴木忠義
さんというのがいて、とても面白いこと言
って。篠原君ねえ、役所は相撲協会なんだよ
と言った。なんです相撲協会って？という
と、相撲協会ってというのは、スターにな
るやつとか実力のあるやつを見つけてきて、
それで相撲をとらせて儲けているわけでしょ。
役所は相撲協会であればいいわけで、設計
とかプランニングとか腕のあるやつを見つ
けてきて、それを支えているのは宇治市じゃ
なくて宇治協会ですよ。そういうのがいい
んじゃないか。というのが一つ。

僕はもう一つは、昔は **how to** だったんです。
どうということかと言うと、橋をつくりま
す。じゃあいい橋を設計してください。広
場をつくりまします。じゃあ、みんなが
楽しめるような広場を設計してください。
こういう話だったんですけど、最近はその
時代じゃなくて、何をつくったらいいか、
何をやったらいいかという時代になっ
てきているので、だから **how to** じゃ
なくて **What** なんですよ。デザインの
前の計画、もっと言うと企画ですね。
このまちをどっちの方にもっていくか。
もうそういう時代になってきているので、
僕はこれまでデザインをやってきました
けど、むしろこれからはプランニング
とか企画、そういうのが求められて
いる。それこそが、相撲協会の役割と
同時に役所の役割で、よくまちづく
りを映画に喩えるんですけど、寅
さんやっていた監督は山田洋二で、
大道具は誰、撮影は誰っていつも
決まっているんですよ。同じメン
バーで。デザインチームなんですよ。
監督はディレクターで指示をする。
だからまちづくりにはディレクター
が必要なんですけど、つまり誰かが、
今度はこういうことをやる。だけ
ど、寅さんが松竹であんなにやれた
のは城戸四郎というのがいて、彼
はプロデューサーなんです。ディレ
クターの上。大衆が何を望んでい
て、どういう監督にやらせたらヒ
ット作が出て、それでみんな満
足してくれるか。どこから金を集
めてくるか。そういったのがプロ
デューサーの役割なので、本当は
プロデューサーが市長とか知事
なんだよな。それが出来な
いんだったら、市町村のある
いは都道府県の幹部がそれを
やる。

ということで、最後に二つ言
いましたけど、自治体の職員
の役割の重要性は、今までと
違った面で非常に重要になり
つつある。というのが私の今
の考えです。

何か役に立てば、どうもありが
とうございました。